

藤井厚二の言説における意匠と設備の関係性について

——「新しき茶室建築」を対象として——

尾崎 勇哉*・河田 智成**

(平成30年11月1日受付)

On the relationship between design and equipment in Koji Fujii's writings

Yuya OZAKI and Tomonari KAWATA

(Received Nov. 1, 2018)

Abstract

The purpose of this paper is to examine Koji Fujii's view of architecture in his discourses about the tearoom. In doing so, the relationship of "design" and "equipment" he catches will be clarified. Fujii considers "design" as the "atmosphere" given by "tradition". On the other hand, he considers "equipment" as inevitable comfort which should be improved by "science". Whilst these two are antithetical, Fujii tries to prove "atmosphere" by "science". However, attempt ends up with his own subjectivity and obscures the boundary between "design" and "equipment".

Key Words: design, equipment, tradition, science, atmosphere

第1章 序

1-1 研究対象・目的・方法

本研究は、『茶道全集 第3巻 茶室篇』(1936)の論考の1編、藤井厚二著「新しき茶室建築」(1935)を対象とする。

藤井の主な著書には、『日本の住宅』(1928)や『床の間』(1934)がある。『日本の住宅』は、環境工学的な視点から藤井の理想とする日本の住宅について詳述したものである。その構成は、緒言と五つの章で構成されており、第一章和風住宅と洋風住宅、第二章気候、第三章設備、第四章夏の設備、第五章趣味となっている。日本の気候風土に根差し、欧米化などに伴う時代の変化に適応した住宅をそれぞれの観点から詳述している。

『床の間』は、床の間を日本の住宅の一大特徴とし、床の間の問題点、特徴、歴史などを挙げ、藤井自身の設計した住宅における床の間を紹介している。その問題点とは、この時代行われている床の間は伝統の型に嵌り、必要のない

ものを盲目的につけていることであり、藤井が時代に適応する床の間を目指していたことが伺える。

「新しき茶室建築」は、藤井が建築家の視点から茶室の改善点を論じている。その構成は、初めにこの時代の茶室について述べている。そして、改善点を、「意匠」と「設備」に分け、「意匠」に関する改善点を照明とし、改善策を論じている。また、「設備」も同様に、改善点を換気とし、改善策を論じている。しかし、現在の建築学においては照明、換気のどちらも「設備」に分類される。このように不明確な藤井の捉える「意匠」と「設備」を本稿ではこの論考の流れに沿って分析する。

また、この論考は題に「新しき」と冠しているように新たな茶室を生み出そうとしている。その点は、『日本の住宅』や『床の間』と同じである。そして、そのすべてで藤井は伝統や時代といった歴史を重要にしている。

そこで、藤井の捉える茶室建築の「意匠」と「設備」の関係性を明らかにすることが目的である。そうすることで、住宅、床の間へと繋がる藤井の建築観や藤井の歴史観を紐

* 広島工業大学大学院工学系研究科環境学専攻

** 広島工業大学環境学部建築デザイン学科

解く手掛かりになるのではないか。

方法としては、まず「意匠」に関する言説、「設備」に関する言説からそれぞれを藤井がどう捉えているかを考察する。そして、2つの論じ方を文末表現などに着目し、特質を抽出し、2つの相違点、類似点から2つの関係性を考察する。

1-2 既往研究

藤井厚二の著書を対象とした研究として次のようなものがある。

宮地功他 「藤井厚二研究：『日本の住宅』についての考察」『日本建築学会中国支部研究報告集 28』2005年、933-936頁。

この研究は藤井著『日本の住宅』と武田五一著『住宅建築要義』（1926）の両者を比較検討し、藤井と武田の住宅問題に対する姿勢、考え方を考察したものである。このように藤井の著書を対象にした研究は多くない。

しかし、藤井の住宅作品「聴竹居」（1928）を対象にした研究は多くあり、代表的なものとして次のようなものがある。

伊藤帆奈美他 「藤井厚二の自邸における通風計画に関する研究」『人間-生活環境系シンポジウム報告集 36』2012年、191-194頁。

永沢ゆき他 「藤井厚二研究～和洋の折衷と混成の手法～」『日本建築学会大会学術講演梗概集』2008年、433-434頁。

これらはそれぞれ聴竹居の設備と様式に着目し分析したもので、断片的に藤井の言説は取り上げられているが、その論理構造の概念を構造化したものは見受けられない。

本稿では「新しき茶室建築」を対象にし藤井の捉える「意匠」と「設備」の関係性について考察し、最終的に藤井の論理構造の概念を構造化したい。

第2章 「意匠」に関する言説

まず、「意匠」に関する言説を引いてみよう。

意匠の優秀、用意周到なるには驚嘆の外はなく、其道の奥義を究めたる古人を追慕するの念は益々深くなつて来る。然るに現代の茶人には単に古きを尊び時代の變遷に覺醒せず頗る頑迷なる傾向があるやうに思ふ。嘗て或知人が茶室を建築したのを見ると、全く古き茶

室を模し、戸棚に他の戸を利用して切り縮め嵌め込めであるのを模して、態々新しい不完全なる戸が使用されていた。[FA: 427]

この言説から藤井は茶室の「意匠」について、優秀であり用意周到であるが、時代の変遷に適応しようとしていないと述べている。

次にどのような茶室の「意匠」を目指すべきか述べられている部分を抜き出す。

古き型をのみに追従しないで、進歩せる科学を利用して時代に適應せる自由の意匠を見るを得ないのは慨嘆の至である。茲に新しい茶室建築に就いて拙案を述べるのは、優秀なる創案の續出することを熱望して、其刺激の一助ともなればと思ふに外ならない。[FA: 427]

ここで、藤井は古き型のみに追従せず進歩する科学を利用した自由な意匠の茶室を熱望している。そして、「古き型」と対に「進歩する科学」という語を用いている。古き型とは伝統という語に言い換えられるだろう。すなわち、藤井は伝統に拘泥せず、現代科学を使用した新たな茶室をつくらうとしていることが分かる。

さらに、「意匠」に関する言説では、伝統的視点と科学的視点の2つの視点から藤井は論じている。

2-1 伝統的視点からみる「意匠」

まず、伝統的視点で述べられている言説を抜き出す。

装置の方法は種々あるが、茶室建築の伝統的な様式を破らないで行ふ場合には、餘りに意匠の變化を求めることは出来ない。従来は多く天井の中央よりぶら下げたコードの末端に電球と簡單なる形のセードを取りつけて、如何にも止むを得ず使用せる厄介者の感がある。従つて疊間には之が天井よりつりさがつているのは不快の感を與へるので、取りはづして夜間だけ取りつける茶室もある。斯の如き場合に紙を使用して建築そのもの、意匠殊に壁面の紙障子の意匠と合せて考察すれば、夜間に適當なる照明を行ふことを得るのみならず、晝間に於ても之が眼障りにならないかと思ふ。[FA: 431]

この言説は照明装置について述べられたものである。藤井は様式を破らない場合、あまり「意匠」に変化を求めることは出来ないと述べ、壁面の紙障子と合わせた「意匠」の照明を紙でつくることを勧めている。言い換えると、壁面の紙障子に合わせ、照明装置も紙で作ることで、伝統的な

様式を破るわけでもなく、夜間の照明を得、画間の目障りにもならないということになる。すなわち、ここで言う「意匠」とは形態的な要素よりも、素材感による雰囲気が必要であると考えられる。

柔らかい落着いた気持ちの光線を得るのには、天井或は壁に電球からの總ての光線をあて、反射せしめ、散光となして間接に照明することが適當であるが、最も容易に行ひ得て効果の多い方法としては和紙を使用することであつて、電球からの光線が一度之を透過すれば散光となつて落着いた感じを得られる。

此和紙を使用することは私の創案ではなく我國では舊來から行つている方法であるが、非常に気持ちの宜しいものであるから廣く使用することを推奨したいと思ふ。[FA: 428]

この言説は、和紙を使用し光線を得る方法について述べたもので、電球から和紙を通した散光は落着いた感じを与えると述べている。そして、和紙を使用することは日本の伝統的な方法であると述べ、伝統的視点から気持ちのいい採光方法を論じている。

我國の美術品の如きは散光によらねば好い効果を醸すことの出来ないものが澤山ある。例えば、舊來の日本畫は軟らかい光線でなければ見られないもので、墨繪を洋風の室内で鑑賞することは不適當であるのは、周囲の色彩が華麗であることよりも、室内の光線は障子紙を透した散光とは違つて、硝子を透した平行光線の多いことが主たる理由ではないかと思ふ。[FA: 430]

この言説で藤井は日本の美術品と光の関係性について言及している。そして洋風の室内で墨繪を鑑賞することは、室内の華麗さよりもガラスを通した平行光線の多さという理由から不適當であると述べている。すなわち、光によって室内の美術品に大きく影響を与えていることが分かる。

このように、藤井が「意匠」を形態的な要素よりも、素材感や雰囲気として捉えていることは言説の随所でみられた。

2-2 科学的視点からみる「意匠」

次に、科学的視点で述べられている言説を引いてみる。

嘗て、建築に使用されている和紙を擦り硝子など、比較して、散光率を調べたことがあるので、それに就いての大要を先づ述べよう。擦り硝子も和紙も多種であ

り又新しいものと使用して汚れたものとは著しい相違のあることは云ふ迄もないが、新しい材料に就いての實驗の結果を述べて見れば次の如くである。(…中略…)之等兩者に就いて先に夫々—00と假定した、直角に透過する光の強さを比較すれば、擦り硝子の場合には障子紙よりも遙かに大きい、散光率の大きいものを使用した方が落着いた気分を醸すことが出来るのは、窓に硝子障子のみを嵌めた室内と紙障子を嵌めた室内とを比較すれば容易に諒解されるであらう。[FA: 428~430]

この言説で藤井は自身の調べたデータを基に和紙や擦り硝子などを比較し、散光率の大きい和紙を使用した方が落着いた気分を得られると實驗を通し、科学的視点から述べている。

しかし、なぜ散光率が大きいことが落着いた気分を醸すことへと繋がるのかという肝心な命題を避け、最終的に室内を比較すれば分かる述べ、藤井の主観によって紙障子を嵌めることが適當だと主張している。

このように、伝統的視点と科学的視点の2つに分けると「古き型のみ追随せず進歩する科学を使用した自由な意匠」の通り2つの視点から「落着いた感じ」の茶室の「意匠」を提案している。そして、その伝統的視点での「意匠」とは室内の雰囲気や藤井の感覚的要素を含んでいるように感じる。一方で科学的視点での「意匠」は實驗を通し最終的には藤井の主観によって表されている。

また、言説中波線のように、これらの言説では「気持ちの宜しい」や「落着いた感じ」といった抽象的な表現が多くみられる。この表現も雰囲気や主観による快を表しており、それらは、伝統的視点と科学的視点の双方から述べられている。

透過率も散光率も前の擦り硝子と障子紙との中間にあるものであるから光源を比較的弱くしないで、容易に散光を得ることの出来る經濟的なよい方法であると思ふ。[FA: 431]

斯の如き場合に紙を使用して建築そのもの、意匠殊に壁面の紙障子の意匠と合せて考察すれば、夜間に適當なる照明を行ふことを得るのみならず、疊間に於ても之が眼障りにならないかと思ふ。[FA: 431]

さらに、前述の言説中下線部とこれら2つの下線部から文末には「だろう」や「思ふ」といった推定表現が多くみられる。断定できない「意匠」の複雑さ、藤井の「意匠」への位置づけがうかがえる。

以上のことから、藤井は「意匠」を単なる美として捉えるのではなく、伝統的視点では素材感によって生み出される雰囲気のようなもので捉えている。そして、科学的視点からは、実験を通し最終的には藤井の主観によって表されている。このように、2つのアプローチとも「意匠」は曖昧かつ複雑である。文末の推定表現もそういったものの表れではないだろうか。

第3章 「設備」に関する言説

次に「設備」に関する言説を引いてみる。

茶室建築には頗る非科学的の缺點が多々あるが、其最も甚しいもの、一つを挙げれば換氣の不完全なる點である。之が設備に對して改善を加へた案はまだ見られない。従つて多くの茶室は六、七、八、九月の夏季にあつては殆ど使用することを得ないで、此期間には和敬清寂は全く影を潜めて居るが、現代科學を利用して換氣を完全にすれば、盛夏の候にても一疊代目の如き個室によく數人を容れて何等の不快を感じしめない。茶室のみならず、總て室内に人の在る場合には換氣の問題は極めて重大なるものであるのにも拘らず、之に對して全く無關心な人々が多く、且又將來の建物は次第に構造が完全になつて、間隔及び其他は減少して外界との區別は緊密になるから、何故に換氣が重要なるかを先づ説いて、茶室に於ける其設備に就いての意見を述べて見たいと思ふ。[FA: 433]

藤井は茶室建築における「設備」の欠点として換氣が不完全であることを挙げている。そして、この時代、換氣に無關心な人が多く換氣の必要性を述べている。そこで、藤井は現代科學を利用して換氣を完全にすると述べている。

次に藤井が換氣の装置について、詳述している言説を引いてみる。

此装置を設くることを得ない場合には、單に送風機を取付けて空氣を移動せしむることが比較的有効にして容易に行ひ得る換氣装置である。この方法は塵埃を除去して適當なる温濕度に調整した空氣を室内に送るのでないから、完全なる装置ではないが、自然換氣に於ける如く外界の風力或は室の内外温度を原動力とするのでないから、必要なる空氣の量を正確に移動せしむることを得る譯である。従つて換氣量の多きを或は確實を必要とする室内にては之に據らねばならないし、装置が極めて簡單であるから、已に建てられてある茶室に於ても之によりて換氣を旺盛にすれば快く使用することが出来る。

其方法は茶室に於ては外觀上からも音響及び振動を恐れる點からも、換氣を必要とする室内に取付けることは出来ないから、送風機は屋根裏の入母屋或は切妻の壁面に取り付けて、其内部の空氣を排除することを計り之を補充する爲めに流入する空氣を茶室内より採る。即ち間接に茶室内の換氣を行はねばならない。[FA: 437, 438]

この言説で、藤井は送風機によって空氣を移動し換氣を行うことについて述べている。そして、この方法は有効で簡單であると述べ、その取付け方について言及している。その際、藤井は外觀と音響、振動を恐れそれを屋根裏に隠そうとしている。すなわち、藤井の捉える「設備」は、快適性を最重要とし、「設備」を可能な限り視覚的に排除しようとしている。

次に、「意匠」に関する言説同様、文末表現に着目し、その特色が多く表れている部分を少し長くなるが引いてみる。

之を改善するには炭酸瓦斯の蓄積を恐れて、それを標準として換氣の問題が論ぜられた時代もあつたが、我々人體は新陳代謝に非常なる影響のある放熱作用を常に平衡の状態に保たしめて攝氏約三十七度半の恆温を維持するために、温度と湿度とに深く注意せねばならないことが明かになつた。其理想的の状態の極めて大體の標準としては、温度は攝氏の約十八度湿度は約六十パーセントで、之よりも上昇して放熱作用が行われにくくなれば氣流を以て補わねばならない。

更に三四年來の研究では、室内を此標準の状態に維持しても、其空氣は尚外界のそれに比較すれば新鮮で、澆刺たるものでないから、その點を改善せねばならないが、其相違の原因に就いては、室内の如き限られたる場所では、人の爲めに空氣中のイオンが減少するからであると云ふイオン説が有力視されて居る。之が明白になれば自然の状態の理想的の場合と同様に室内を保つことも出来るであらうが、温度湿度及び氣流を適當に保たねばならないことは基礎條件で、其適否は人體に至大なる影響を及ぼすものである。我國の外界の氣候が先の標準に近い状態にあるのは、東京、京都、大阪付近では五月中旬の午前九時十時頃で、寒い季節の十二、一、二月ごろは低温であるのみならず少湿であり、暑い季節の六、七、八、九月頃は高温で且つ多湿であつて非常に標準の状態とは遠ざかつて居るから、之等の期間には室内に適當なる氣候を形成せしめる設備を施さねばならない。殊に夏季に於ては甚しい苦心を要し換氣に就いて頗る注意せねばならない。

換氣をどの程度に行はねばならないかは、人が室内

にある場合に其周囲の空気に及ぼす影響に就いて考察すれば明かである。[FA: 433~435]

このように「設備」に関する言説では文末に「ねばならない」という当為表現を多く用い、「設備」を必要最低限行わなければならないこととして捉えている。

すなわち、藤井は茶室の「設備」を現代科学により改善しようとしている。そして、「設備」の快適性を最重要とし、視覚的な存在からは可能な限り排除しようとしている。また、快適性を示すため理想の温度、湿度を数値化しそれに向け実験を行っている。

第4章 2つの関係性

以上のことから「意匠」と「設備」の論じ方には似て異なる部分が多い。「設備」では通風の重要さと改善策を論じており、科学的視点が主になっている。そして、換気の数値化を図り、実験を行い、その筋道と結果も明瞭に述べている。

一方、「意匠」に関する言説は、伝統的視点と科学的視点に分けたとき、その科学的視点は「設備」と同様、実験を通し、快を目的としている。しかし、その快は藤井の主観によるものと必然的に行われる快とで大きく異なる。また、「意匠」に関する言説の伝統的視点では素材感によって生み出される雰囲気を目としてしている。このように、「意匠」は2つのアプローチとも「意匠」は曖昧かつ複雑である。

では、このように曖昧な「意匠」と明確な「設備」は具体的にどこで交わり、切り離されているのだろうか。一見、「意匠」に関する言説の科学的視点と「設備」に関する言説はその論じ方が似ており同等のものとみられるかもしれない。しかし、その言い回しや快の次元が異なり、全くの別物である。そこで、「意匠」における言説の伝統的視点に着目してみよう。

伝統的視点は形態的な要素よりも、素材感による雰囲気が重要であると考えられる。そして、「設備」に関する言説は「設備」の快適性を最重要とし、「設備」を可能な限り視覚的に排除しようとしている。

すなわち、この2つを比較すると、「意匠」を視覚を超えて人間の身体に直結した雰囲気として捉えている。そして「設備」を視覚的に排除し、人間の認識しない内に間接的、必然的に行われるべき快として捉えていることがわかる。よって、この2つは完全に切り離され対極に位置している。

では、「意匠」に関する言説の科学的視点はどのような位

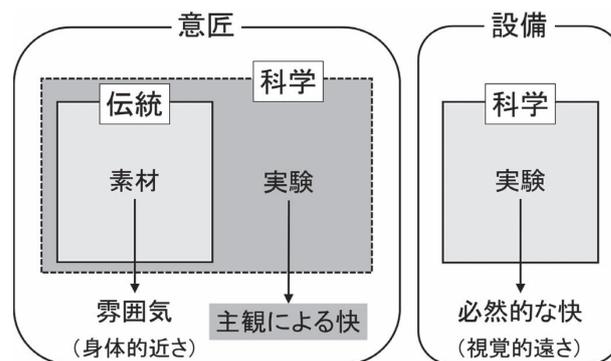


図1 「意匠」と「設備」の関係性

置づけなのだろうか。それは「意匠」という枠組みと科学的視点という枠組みでは2つともに属していることから、前述の完全に切り離された2つの間に位置している。そして、その役割は「意匠」と「設備」の境目を曖昧にし、「意匠」を出来るだけ科学的に論じようとしている。

第5章 結

藤井は「意匠」を、視覚を超えて人間の身体に直結した雰囲気として捉えた。一方、「設備」を視覚的に認識しない内に間接的、必然的に行われるべき快として捉えた。そして、意匠を科学的に証明しようとしたが、証明できず自身の主観に完結した。結果的にそれは「意匠」と「設備」の境目を曖昧にしている。

このような藤井の「意匠」と「設備」の捉え方、関係性は現在の建築学における「意匠」、「設備」とは異なっている。現在の2つは美・用・強の美として「意匠」、用として「設備」として捉えられている。そして、その関係性も身体や視覚で分離しているわけではない。

本稿では藤井が茶室建築について論じたもののみを対象に分析を行った。しかし、『日本の住宅』でも「設備」や「意匠」に関する言説が多くみられた。今後は本稿で明らかになった藤井の捉える「意匠」と「設備」の関係性をそこに読み取ってみたい。

注

本文における下記文献への参照は、次の文献略記号と頁数によって示した。

FA：藤井厚二「新しき茶室建築」『茶道全集』第3巻，創元社，1936年，427-439頁。

また、文中における下線部及び波線部は筆者強調によるものである。